

千葉県

街道 1

千葉県の街道遺産の最初は、立野～下新田の鎌倉街道上総道・跡(市原市・袖ヶ浦市、鎌倉時代?) **A**である。現存する鎌倉街道の推定ルートのはほとんどは埼玉県に集中しているが、全国最長(約 10 キロ)の鎌倉街道は、小櫃川の低地の北側を東西に延びる台地の区間で、知名度も高い。ただし、路面は舗装され往時の面影はない。



千葉県らしい第二の街道は、ルートが確定していて、延長 37 キロにわたりほぼ直線が続く特異な道路、歴史的にも有名な御成街道である。徳川家康が、慶長 19 年の正月(1613 か?)に東金で鷹狩りをするため、前年の 12 月に佐倉藩主・土井利勝に命じて造らせたと言われる。ただ 1~2 ヶ月で完成させることは無理なので、家康が実際に通行した元和元(1615)年 11 月の完成とみなすのが妥当であろう。

街道 2

千葉県を代表する街道遺産は、埼玉県に次いで全国で 2 番目に多い道標群であり、本データベースに登録されている件数は 854 基に達する。これらの道標は、東京湾沿岸から埼玉県境にかけて集落が集中していた地域に分布し、房総半島の先端に行くに従い急速に減少する。

千葉の道標の特徴は(埼玉、東京と

も似ているが)、兼用道標がほとんどを占めている点にある。すなわち、単体としての道標はほとんど存在せず、庚申講や飛脚問屋が組織として、あるいは、信仰の篤い人々が個人として、青面金剛、馬頭観音、地蔵などを奉建した折に、旅人が道に迷わないようにとの配慮から塔身の側面や台石に道しるべを刻んだものがほとんどある。埼玉・東京と比べて特徴的なことは、馬頭観音、中でも、馬乗り馬頭観音の兼用道標が相当数現存している点である。その中でも、代表格は椎津の馬乗り馬頭観音道標(市原市、安永 5(1776)) **A**であろう。後述するように、千葉の最大の特徴に幕府が設置した野馬の牧の存在があるが、このことと馬頭観音の存在との間には一定の相関が見られるとされている。馬頭観音以外の像容では、他地域ではほとんど見られない大黒天像が多く建立されていることも特徴と言え、こちらの代表格は上花輪の大黒天像道標(野田市、文政 10(1827)) **A**である。

道標について考える時、千葉のもう一つの特徴に成田山の存在がある。江戸を中心とし、関東一円で成田詣が盛んであったことから、参詣者のために建立された道標が、成田山から西に向けて(東にはない)埼玉県内にまで分布している。代表格は、終着地近くの新勝寺稲荷社に建てられた高さ 3m 近い道標 **A**で、頂部に成田山新勝寺の寺紋を三面に陽刻した石彫刻が置かれている(写真は次ページの左上)。





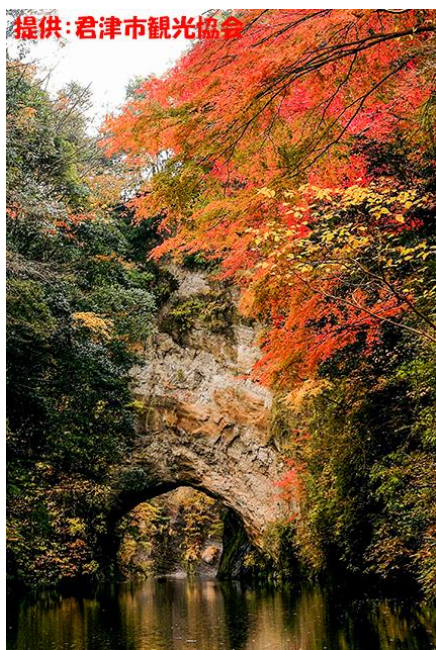
か固有の呼称はないが、千葉県では「川廻し」と呼ばれている。房総半島南部に蛇行河川が多いことを反映したユニークな発想であり、地形により瀬替えとトンネルに分かれる。それらの中で最も古いとされるものが、甲坂下の川廻し（伝宝洞）（君津市、万治年間（1660 前後））**A** である。地元・笹の野村藤右衛門が久留里藩主・土屋利直の許可を得て開削したもので、川廻しでこうした経緯・年代が把握されている例は珍しい。ただ、残念ながら亀山湖に半分水没しており、ショートカットの意味が分かりにくい。一方、

舟運 1

千葉県の北縁には利根川が流れているので、江戸期には舟運で賑わった河岸が多いと言われるが、その遺構はほとんど残っていない。利根川以外の川を含めても、呼塚河岸の常夜灯（柏市、慶応元（1865））**A**（右上の写真）、行徳河岸の常夜灯（市川市、文化9（1812）、市有形）**B**、津宮河岸の常夜灯（香取市、明和6（1769）、市有形）**B**が残っている程度である。

農業 1

千葉特有の農業遺産は、全国でも新潟県と千葉県でのみ見られる「河川蛇行部のショートカットによる農地の創造」である。新潟県では山間部に位置するせい



鍋石の川廻し（濃溝滝）（君津市、江戸末期～近代初頭？）**A**は、由来は不明、年代も確定していないが、トンネルの中を川が滝状に流れており、ショートカットによる水位差を実感することができる。

農業 2

農業という括りに入れることが妥当かどうかは別として、福島、千葉、長野、静岡、宮崎の5県では、規模の大小はあるが馬の飼育が行われてきた。その中で、長野と宮崎は中世、福島・千葉・静岡は江戸期の遺構が残っている。また、同じ江戸期でも、福島は野馬追い神事のため、静岡は農耕や運搬用の馬の飼育のためであるのに対し、千葉の場合は幕府直轄の軍馬の育成場と、目的もそれぞれ異なっている。

千葉における馬の放牧は江戸初期に始まり、小金牧、佐倉牧、嶺岡牧の3ヶ所で行われていた。小金牧は、上野・中野・下野・千飼・庄内・印西・高田

台の7牧で構成され（高田台のみ18世紀）、佐倉牧は、油田・矢作・取香・小間子・内野・柳沢・高野の7牧、嶺岡牧は、柱木・東・西の3牧（東と西は2つに分かれる）から成

り立っていた。これらの牧は、該当する地域の市街化の程度によって左右されるものの、すべての牧で何らかの遺構が確認されている。これほど大規模に飼馬施設が存在し、かつ、残っている県は他になく、千葉県の特徴と言える。

飼馬に関わる具体的な施設は、①放牧地を囲む土塁（野馬土手）と、②飼育した馬を年1回集めて捕獲選別する場所（野馬捕込）に分けられる。圧倒的に数の多いのは①である。一方、②は各牧に原則1ヶ所しか造られていないため、現存遺構は少ない。

野馬土手は土地利用が進み、不連続にしか残っていないが、それでも単独で1キロを超えるような長大な土手が何箇所も現存している。ただ、野馬土手で文化財に指定された例は現時点ではまだないので、今後の開発に伴って減少する恐れは多分にある。また、残り方も、往時の土手を偲ばせる油田牧の野馬土手・跡（香取市、永禄年間（1558-70））[A](#)のようなものから（下の写真〔上〕）、木が密生したり、浸食されて低くなったものまで様々である。最も有名な野馬土手は、舌状台地を遮断して造られた上野牧の野馬土手・跡（柏市、慶長19(1614)）[A](#)で、壕付きの二重土手が良好に残っている（下の写真〔下〕）。

撮影：馬場俊介（2009.6.14）



提供：東葛人（http://www.tokatsujin.com/）

一方、野馬捕込で現存するものは9ヶ所だけで、その中では、中野牧の野馬捕込・跡（鎌ヶ谷市、慶長19(1614)、国史跡）[A](#)の保存状態が最良である。他には、1ヶ所が県史跡に、2ヶ所が市史跡に指定されている。



撮影：馬場俊介（2009.6.13）

鉱業 1

鋸山（富津市、江戸後期）[A](#)は、石堀用に江戸市街でも盛んに用いられた房州石（白色凝灰岩）の最大の石切り場であった。しかし、昭和戦後まで現役で切り出されたため、江戸期の採掘箇所を特定することは困難である。

防災 1

房総半島の太平洋岸は、津波被害を受けやすい地勢的環境にあったことから、日枝神社の津波避難丘（鴨川市、慶長9(1605)以降）[A](#)が残っている他、津波供養塔も、鷲山寺（茂原市、市史跡）と本興寺（長生村、村有形）の2ヶ所に残っている。全国的に見ると、津波供養塔は三重、徳島、高知でかなりの数見られるが、江戸期の津波避難丘を見ることができるのは千葉だけである（静岡に高潮避難丘）。



撮影：馬場俊介（2012.12.17）